

◎ 月一報恩講(寺子屋サロン)：毎月28日の13時30分～15時

勤行・法話・座談(お茶菓子アリ)の和気あいあいの集いです。
各々が今思っていることを話題にしたり…、報恩講・お彼岸・お盆前
は仏具をお磨きしたり…、お寺でならではのこをしています。

開催日：6/26(金)、7/28(火)お磨き、8/28(金)、9/28(月)

◎ 死別の分かちあいの集い：13時～15時

・夫を亡くした方：毎月第1土曜日 6/6、7/4、8/1、9/5、10/3
・自死遺族の方：毎月最終土曜日 6/27、7/25、8/29、9/26
当事者の方々の分かちあいの集いです。住職も参加、傾聴します。

◎ 整体・ハンドケア・ヨガ・敬老カフェ・よろず相談会

毎月開催していますが、日にちや曜日を固定していないので、
超覚寺公式LINEをご覧ください。お寺までお問い合わせください。

◇ 寺院護持費(墓地管理費)について

例年、原爆の日やお盆の時期にお納めいただく方が多く、
玄関が混み合います。お振り込みもどうぞご利用ください。

【ゆうちょ銀行 15190-55770601】

他金融機関からゆうちょ銀行へ振り込まれる際は、
次のように入力してください。

【名義】 チョウカクジ

【店名】 五ーハ(読み ゴイチハチ)

【店番】 518 (普通預金) 5577060

◇ 報告・連絡・“僧”談

・東本願寺が仏教要素も盛り込んだエンディングノートを作製
しました。超覚寺にご用意しておりますので、お求めの方には
1部300円でお分けしております。玄関までお送りください。
・8月6日の「ピースナイター」巨人戦、8月15日の阪神戦の
マツダスタジアムチケットがあります。広島に帰省される方は
一緒に応援に行きませんか。どうぞご連絡ください。

発行人：超覚寺住職 和田隆彦(釈隆恩) (*ーー)人 i 合掌

2026年6月夏 超覚寺報 第72号

【八丁堀だより】



浄土真宗(真宗大谷派・東本願寺)



林鷲山

超覚寺

憶西院

RIN-O-ZAN OKU-ZEI-IN CHO-KAKU-JI

〔since 仏暦2162, 西暦1619, 元和5〕

〒730-0013 広島県広島市中区八丁堀 5-2

Tel : 082-221-1234 ; 090-9999-3113

Mail : wada@namuamidabutsu.com

HP : http://www.namuamidabutsu.com

http://mytera.jp/tera/48chokakuji

超覚寺 夏の法要のお知らせ

慈光のもと、平素は様々にお世話になっておりますこと、
ありがたく存じます。

さて、下記の通り法要・法座を勤修いたしますので、
ご参詣くださいますよう、ご案内申し上げます。 <(_ _)>

◎ 原爆の日の法要

8月6日(木) 8時15分 広島原爆の日 1分間黙祷

原爆死没者追弔会(約15分間)

8月9日(日) 11時02分 長崎原爆の日 1分間黙祷

8/6の18時30分から、広島市内の僧侶らが平和公園の原爆供養塔
(無縁の御遺骨を納めている)に集まり、宗派ごとに15分の法要を勤めます。

この法要はあまり知られていないので参詣者は少ないですが、

浄土真宗以外の読経を聴ける機会はそうないので、お参りしてみませんか。

◎ 孟蘭盆会(戦争死没者追弔会)の法要

8月14～16日(金・土・日) 10時～10時30分

※ お盆・初盆の読経は、希望日時が重なりますので早めにご連絡ください。

※ お盆期間中、本堂を開放しています。どうぞ阿弥陀如来にお参りください。

※ 広島県南部の伝統供物【盆燈籠】、以前は禁止していましたが、今は

お墓の周りにお供えできます。盆燈籠は外のお店でご購入ください。

超覚寺では、墓参礼・墓花・お線香のみ玄関にて販売しております。

※ 境内の駐車場は6台まで、満車の際は近所の駐車場をご利用ください。

※ 8/17以降に墓地を清掃し、墓参礼・墓花・盆燈籠を片付けます。

超覚寺オリジナル墓参礼 ➡

※ お墓参りができない方は、住職が代行でお参りいたします。

墓花・盆灯籠・墓参礼もお供えいたしますので、どうぞご連絡ください。

◎ 秋季彼岸会(永代経)法要

9月19日(土) 13時30分 ～ 勤行:住職

14時 ～ 15時30分(休憩有)

法話:瓜生崇師(滋賀県東近江市玄照寺)

☆ 無縁遺体

報道番組で「無縁遺体」を特集していました。孤独死されて身元がわからな
い行旅死亡人とか、身元が分かっても家族や親戚がどこにいるのか分からな
いとか、様々な理由で引き取り手がいないご遺体だそうです。

無縁のご遺体は、亡くなられた場所の市区町村が火葬して埋葬するように
法律で定められています。超覚寺では、そのようなケースが今まで無かったの
で、特殊な例だろうと思っていますが、団塊世代が後期高齢者になっている
ので、そのような無縁遺体が増えて自治体が困っているそうです。

家族や親戚などの身寄りを探していたりして御葬式を待つご遺体が納めら
れた棺桶を保存する施設が番組で紹介されていました。有縁だと御葬式まで
安置室にご遺体を寝かせていますが、無縁遺体だと納めた棺桶が巨大な冷
蔵庫に収納されていて、それが何とも切なくなりました。

超覚寺は御門徒の皆さん全員に寺報を送っているのですが、もし独り身の方が
自宅でご何かあっても、お寺の封筒を見つけた方が超覚寺には連絡を入れてく
ださるでしょう。ウチにご縁のある方には「無縁」になってほしくありません。

実は引き取り手のない「無縁遺骨」も広島市で増えているそうです。2025
年では、広島市が火葬して広島市立合葬墓に納めた遺骨は約300体にもな
り、5年前から倍増しました。でも身元は確認できているものの親戚が受け取
りを拒むケースもあり、この1年間で引き取られた遺骨は数体に留まりました。
背景には、身寄りのいない人、いとも頼ることのできない人が増えている実情
があるようです。超覚寺でもそういうご相談も増えており、各々に相応しい御葬
式・納骨になるよう一緒に考えています。

終活やエンディングノートは世間に広く認識されるようになりましたが、それ
を実践している人はそう多くはありません。「本願を信じ念仏申さば仏になる」
という浄土真宗の教えは、後生の一大事に備えるという意味では、終活に当
たるのかもしれない。そういう憂いを無くすことも、今を楽に生きていく支えに
なると思っています。

☆【解説】絵になった沖縄戦（佐喜真美術館HPより、佐喜真道夫館長）

「原爆の図」は、広島を見てしまった画家・丸木位里、丸木俊夫妻の私たちへの遺言である。「核時代」は人間が「類としての消滅」を意識する時代である。お二人は戦争のことをさらに深く考えるために「沖縄戦の図」を描かれた。位里さんは原爆の図を描き、南京大虐殺をかき、アウシュビッツを描きましたが、沖縄を描くことがいざばん戦争を描いたことになりました」と述べられている。

制作にあたって、お二人は数年前から、沖縄戦に関する本を160冊以上読み、学者や沖縄戦を専門にする人々にレクチャーを受けた。そして生き残った多くの人々と、それぞれの現場に足を運び体験談を聞き、画家は多くの風景画を描いた。そして1983年に連作「おきなわの図」、翌年に巨大な「沖縄戦の図」(4m×8.5m)を描かれた。大胆な構図からくる迫力がすごい。

細かく見ていくと、人物の着物も、日用品を運んだザルも、欠けた茶碗の模様も、戦争中の物が丁寧に描かれている。

沖縄戦を体験したおじいさんは、コップがわりに使用した貝を指しながら、「こんなことまで知っていたはずがない。ほんとうにヤマトンチュウが描いたのか」と驚いておられた。そこには戦争を語る時、徹底的に真実にもとづいて考えてゆく丸木ご夫妻の態度が貫かれている。

私は位里さんに、「先生の線にはとても大きなものを感じるんですが、どうしたらあんな線をひけるのですか」と聞いたことがある。位里さんは、「山を見るじゃろ、見るだけじゃダメなんじゃ。こっちが見ると向こうから何かがくるんじや。そのぶつつかうところをなぞればいいんじや」とおっしゃった。「向こうから何かがくる」とは何をいっておられるのか、「名人列伝」などの世界にも聞こえるが、私は位里さんが対象の本質と真正面からぶつかると、外観と内観をゆっくりとくり返しておられる姿を見たことがある。それは戦争で死んでいった人の根源の想いをつかみたい、という位里さんの祈りのようにみえた。

ご夫妻は、ガイコソの山の中に自らの像を描き込まれた。「戦争で死んでいった人々は生きている私たちに話をすることができません。だから死んでいった人々にかわって私たちがこんな絵を描くんです」とおっしゃる俊さん。このようにして描かれた絵の前に立つ時、私たちは戦争の真実にふるえあがると同時に、戦争と対峙する精神に勇気づけられる。苦しみか深ければ深いほどはげまされている様子をみながら、「沖縄戦の図」が今という時代に存在していることの大きな意味を思う。



☆ 最近のお葬式

「お通夜、ご葬儀とも近親者のみにて執り行いました。」

故人のご意向により事後報告とさせていただきます。」

コロナ禍騒動以来、こういう計報連絡が増えています。コロナ禍の頃の御葬式は、そういう対応は故人がお世話になった周囲への「配慮」でした。国を挙げて「3密禁止」を推奨していた当時は仕方がありませんでした。今はもう落ち着いているのに、こういう「いつの間」に葬式終わって事後報告のスタイルは、相変わらず続いています。そして一日葬や直葬も徐々に増えています。

葬儀会館での御葬式は、ある程度お金もかかるし、参詣された方々への対応もあって疲労困憊、そして大ぴらに悲しむことも出来ない…。以前ならお参りしていたに近い側も、義理事に参加しなくても良くなり楽になったのは確かでしょう。そんな奇妙な「双方の利害の一致」で、御葬式はコロナ禍を境に一気に「親族限定事後報告」スタイルに振り切ってしまいました。

でも、故人の御尊顔を見てお礼も言ってお別れしたかった人も多いでしょう。普段はなかなか会えなかったお詫びも伝えられたかもしません。故人の知人友人が自宅の御仏壇にお参りに来続けるのがしんどい…、とよく聞く話です。参詣者が多少増えても葬儀費用は変わりません。御香典を受け取らないのも失礼に当たらず、そうすれば香典返しの手間も不要です。バブル期で華美になってしまった御葬式が、コロナ禍騒動で本来の御葬式の意義を見直す機会になったのに、今の事後報告のままじゃ、なんか寂しい気がします。

御葬式は、大切な人を亡くした痛みを鎮め故人を偲ぶ場ですが、浄土真宗的には、故人に縁ある人たちが己を見つめ直す“仏縁”を頂く場です。だから近しい方々に御葬式を連絡してほしいです。それは亡くなった本人の供養のためだけでなく、故人が生前世話になった周囲の方々に仏縁を贈る最後の恩返しだからです。盛大にすることもなく、ささやかに仏縁に出会う場を設けることは、成仏した故人の「諸仏としての」最初のお仕事なのです。どうかその御縁・仏縁を奪わないで頂きたいと思います。

※超覚寺の御門徒は、本堂の使用料不要で御葬式が出来ます。この御荘厳⇒や他の諸費全て込みで葬儀社さんへのお支払いは、約60万円になります。



◇ “寺” 後報告

① 3/22:春の彼岸会法要

三連休の最終日の日曜日、雨天の予報でしたが、27名がお参りくださいました。例年通り祖父江佳乃先生の高座説教、今回は先生ご自身の近況報告と“承元の法難”とを和えたようなご法話でした。祖父江先生と私は同い年なので、その近況はとても他人事には思えず、いつも以上に身に沁み入る感じがありました。

法要が終わってからは、さながら推し活の写真撮影会の様相でした。好い布教使の条件は「一声、二節、三漢」と言われています。何を話すかも大事ですが、「この人の話を聞きたい」と思わせる立ち居振る舞いも大事なんでしょうね。



② 4/5:花まつりマルシェ

13時から16時過ぎまでの開催でした。15時頃まで大雨でしたが、入れ替わり立ち代わりで45名が起こしくくださいました。各種作品販売や、ライブ(篠笛・琴・三線・サクソス・紙芝居「怒り地蔵」)、カフェ、花屋、ハンドマッサージ、整体等、昨年より出店も増えワチャワチャした雰囲気になったおかげか、居心地はとても良かったように感じました。私は法衣も着ず勤行もせず仏事っぽくしませんでした。本堂での開催なので、誰もが仏さまの存在を感じたのではないかと思います。

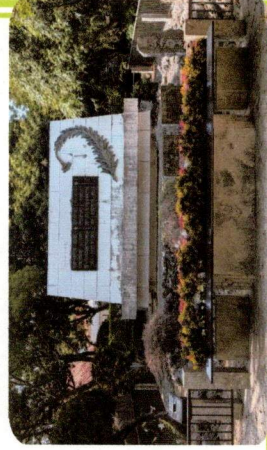
4月8日は釈尊降誕会(お釈迦さまの誕生日)で、花まつりとも呼ばれます。超覚寺では誕生仏(生まれたばかりのお釈迦さま)に器の甘茶を注いでもらえるよう、毎年4月1日～8日まで門前に花御堂を設置しています。

来年も開催しますので、お楽しみに～。



③ 4/22:ひめゆりの塔

沖縄県事務所へ研修に行きました。「ひめゆりの塔」へもお参りし、併設されている沖縄戦の資料館も観覧してきました。



一番印象的だったのは証言映像でした。もうすでに亡くなっている方々が、ご自身の極めて個人的な体験談を淡々と語られているビデオが繰り返し再生されていて、それが私にはスゴク胸に刺さって、戦争の実相をより重く感じました。「原爆」は、誰もが事前に何も知らなくて、多くの方々は突然亡くなりました。そして生き延びた方々は、終戦後もケガや病・差別等ずっと地獄のような日々を苦しんできました。「ひめゆり」は、誰もがいずれ自分も看病している兵士のように苦しんで死ぬんだと思いが生きている、そして強制的に誰かを殺したり誰かに殺されたり、死ぬまで終戦まで地獄が続いていました。展示品や各種データはもちろん大切な事実なんですが、数字や物は頭での理解で留まってしまいます。でも、証言映像は「自分はこんな目に遭いたくない」と身や心に迫ってきて、本当に怖いと感じさせられました。

体験者の証言内容を伝承した人がライブで同じように語ったとしても、実際に体験されたご本人が語っているビデオの方が、はるかに戦争の悲惨さを伝えられるのではないかと思います。個人的で悲惨な事件だけでも、それは社会不正義や国家間戦争と地続きだとも感じました。

④ 5/6 原爆の語り部の会

この会は2006年に「被爆体験者の生の声を届けたい」という有志が始め、今はシンガーソングライターのHIPPYさんが主宰し、被爆された方のお話を直接聞ける貴重な被爆体験証言の場となっています。毎月6日に広島市中区の各所で開催され、今回は第242回目になり、51名が集まりました。



証言くださったのは、高東征二(タカトウ セイジ)さん。当時4歳で爆心地から飛10kmの(五日市)観音村千同で被爆。突然の爆風と光に驚いて部屋から飛び出し、広島市方面に火球を見た後、黒い雨が降るのを軒下から眺めていました。後年、黒い雨の影響で健康を害し困窮している人々を知り、佐伯区黒い雨の会を結成し、被爆者認定と保障を求めて裁判を戦い、内部被曝の恐ろしさ、正しい知識を多くの人に伝えてくださいました。